

「人間の条件」



第3部 <戦雲篇>

第4部 <望郷篇>

2005（平成17）年7月9日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

<第3部が描くのは、軍隊の不合理性！>

徴兵免除を一方的に取り消された梶は関東軍に配属され、極寒の北満にいた。軍隊では初年兵は古兵からいびり倒されるのが慣例。そのうえ梶は、憲兵に反抗したため今ここにいると噂されていた。そのため、アカとみなされて、冷や飯を喰わされていた新城一等兵（佐藤慶）と同様、常に冷たい視線が……。そのうえ梶は、特に反抗する意思はないものの、いわゆる「態度がデカイ」ため、常に古兵のしごきの対象に……。 「第3部」では、これでもか、これでもかこれでもかというほどに軍隊という組織の不合理性が描かれているので、それに注目！梶は人の数倍の体力と気力があつたから、その中でも耐えられたものの、体力も気力も弱い小原二等兵（田中邦衛）などは、鉄砲は命中しないわ、歩行訓練では落伍するわの状態だったため、鉄拳制裁の毎日の中ついに……。

<一晩限りのすばらしい夜も……>

こんなイヤなことだらけの初年兵暮らしだったが、そんな梶をはるばる訪れてきたのは愛妻の美千子。「無謀ですなあ」と言いながらも訪ねてきたものはやむをえない？中隊長は特別措置として、一晩限りの宿の提供と訓練の免除を認めることに……。そんな中、展開される月明かりのシーンが「裸になって窓辺に立って欲しくないか。君の裸をこの目に焼き付けておきたいから」という有名なセリフとそのシーン……。そりゃすばらしい夜になったはずだが、翌日はこれを妬む古兵たちからのしごきの嵐が……。

<ソ連への脱走は可能……？>

ソ連への愛の逃避行を執行し、「赤い恋の逃避行」と呼ばれて一躍有名になったのは新劇女優、岡田嘉子と演出家、杉本良吉との亡命劇。これは1938年1月3日にホントに起きた大事件だ。

その物語を彷彿させるのは、思想犯（アカ）を兄に持つ新城一等兵の脱走劇。営倉入りを命じられた新城が営倉に入ったとき、突如起こったのが、「野火だ！」という声。またたく間に広がってくる野火を鎮めるため、部隊は総力をあげて対処したが、その混乱に乗じて新城は1人野火の煙の中を反対方向に……。さて、その成否は……？

<病院内で得た親友の丹下>

新城の脱走を手助けした梶は、泥水の中にはまりこんで半死状態。そんな梶が意識を回復したのは病院のベッドの上。ここからが第4部の始まりだ。この病院で梶はやさしくて美しい徳永看護婦（岩崎加根子）やアカがかつた一等兵の丹下（内藤武敏）と出会うことに……。徳永看護婦は、梶と知り合い仲良くしているところを鬼婦長（？）に発見されたため前線に飛ばされることに。そして丹下もキズが治ったと判断されて前線に行くことになったが、2人は「きっとまた会えるさ」と楽観的……。

病が癒えた梶が配属されたのは、青雲台地。そしてそこには、老虎嶺鉱山へ行く前に別れた親友の影山少尉（佐田啓二）がいた。影山少尉の庇護の下に上等兵となった梶は、初年兵の教育係を受け持つことに。軍隊の不合理性を身にしみ感じていた梶は、せめてもの軍隊内改革（？）とばかり、「俺は初年兵を殴らない」との教育方針をたてて、これを実践しようとしたから、当然ここでもさまざまイザコザが……？

ここで面白い登場人物が1人。それは20歳そこそこの寺田二等兵（川津祐介）。彼の父親は陸軍少佐だったため当然徹底した軍人教育を受けており、梶のような軟弱な（？）教官はありがた迷惑……？寺田はコトあるごとに梶と議論し、反抗したが……。

<最前線での塹壕掘り>

第2次世界大戦中のドイツとフランスとの西部戦線における「塹壕戦」を描いた戦争小説の名作がエーリッヒ・マリア・レマルク作の『西部戦線異状なし』。膠着した西部戦線では、まさに塹壕が命！日中戦争の時代やソ連と対峙していた関東軍においては、このヨーロッパの戦いほど塹壕戦は発達していなかったが、それでも塹壕の必要性、重要性は明らか。

たしかに、青雲台地に梶らが築こうとしていたのは塹壕といえるものだったが、突然進入してきたソ連軍の前に影山らの部隊はすでに全滅。明日にも迫ってくるソ連の戦車を前にして梶らが掘っているのは、塹壕と言えるものではなく、いわゆる「たこつぼ」と呼ばれる、人1人入れるだけの小さい穴。この穴だけが自分の命を守る唯一つの砦というわけだ。

<「たこつぼ」はたちまち戦車に蹂躞>

ごうごうと音をたてながら進行してくるソ連の大戦車部隊に対して、関東軍の後方から撃っていた野砲もすぐに沈黙……。そして古兵たちが所属していた、対戦車部隊もたちまち全滅。小銃部隊の梶たちは弾の数を気にしながら各自射撃していたが、ソ連の戦車群によって「たこつぼ」はたちまち蹂躞。そして、とっさに寺田を引きずり込んだ「たこつぼ」の中で、梶は九死に一生を得ることに……。そしてしばらくすると……？

しごきまがいの訓練で強兵を育て、最強を誇っていたはずの関東軍は、強力なソ連軍の前に一瞬にして壊滅。梶たちは友軍から完全に途絶された状態で戦場に取り残されることに。さて梶や寺田は、そして生き残りの敗残兵たちはこれからどうするのだろうか……？

2005（平成17）年7月13日記

- ・ 総論
- ・ 第1部、第2部の評論
- ・ 第5部、第6部の評論